展望

思考パターン

大西　淳子

花水木の道があれより長くても短くても
愛を告げられなかった
吉川宏志『青蟬』

愛の告白の歌としてあまりにも有名な一首。言葉にするまでの永遠のような数分間を花水木の道という瑞々しい景のなかで表現している。しかし、土岐友浩による「月のコラム」（砂子屋書房）二〇二〇年一月に、いまの若者には、この歌が愛を告げたいのに告げられなかった歌として読まれている、とあり驚いた。

「若者の読解力の低下」がすぐに頭をよぎったが、土岐はこれを否定している。二〇一八年の学習到達度調査によると、低下が認められたのは「読解力」の三要素のうち、「情報を探し出す」「評価し熟考する」の二つで、「理解する」つまり「字句の意味を理解する。統合し、推論を創出する」力は、安定的に高い結果となっていた、とのこと。

土岐は「リアリティの重心」というキーワードで論を展開している。

「長くても愛を告げられなかった」「短くても愛を告げられなかった」少なくとも二パターンの主体の姿を思い、その想像にリアリティの重心を置くために、何割かの読者は「どのようにしても、この愛は告げられなかった」と結論するのではないか。

土岐の論は何度読んでも難しく、私は考えあぐねた結果、「思考パターン」に行き当たった。構文が同じでも、場面によって読みが変わったからだ。きっかけは、飯田和馬のツイッターアンケートだが、正反対の読みとなるターニングポイントなので紹介したい。花水木の歌と構文が同じいくつかの文章で、どのような事態を思い浮かべるか聞いている。

「薬剤の投与があれより早くても遅くても彼は助からなかった」この文章を読んで私は、薬剤をどのタイミングで投与したとしても、どのみち彼は助からなかったと思ってしまったのだ。実際のアンケート結果でも、彼は「助からなかった」が六割強で「助かった」を上回った。回答数は約二万人。

思考パターン、つまり「〇〇がアレよりプラスでもマイナスでもNG」という時、プラスマイナス0の地点に「希望」があると思うか「絶望」しかないと思うか。長くても短くてもダメな時、ちょうどよい所に希望が見出せるか。『青蟬』は、携帯電話も普及していない二十五年前の歌集。今、対面で告白経験のある人がどれくらいいるだろうか。思考パターンは経験に影響をうけると思う。

また「歌集で読むか一首だけで読むか」でも読みが違うだろう。歌集で読むと自分の思考パターンというより作中主体になり代わって読む。花水木の歌は「君と住む部屋」という章に置かれている。

ダンボール箱より妻はだばだばと本を取り出す蛾の産卵のごと
君とわれ互みに持てる『月語抄』二冊を並べ住み始めたり

この章の冒頭二首だ。新婚生活をスタートする場面であり、愛は成就している。

作品は発表した地点で作者の手から離れ、読者の思考パターンや時代背景によって、解釈が変わっても仕方ない。しかし、作歌意図を正確に捉え解釈しようとするなら、作中主体のいた地点に近づくことが必要だろう。それは人や時代に寄り添うことだと思う。

今年も花水木が美しく咲く。